

国 語

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

友情論の古典として必ず挙げられる作品にモンテーニュ（一五三三―一五九二）の『スイソウ録（エセー）』がある。ボルドー高等法院のドウリヨウとして知り合ったエチエンヌ・ド・ラ・ポエシー（一五三〇―一五六三）と自らの友情が回想されている。この友情は二つの意味で「一性（identity）」を特徴とする。まず、二人の人間の魂が一つになることが強調される。

私がお話している友情の場合、二つの魂は混じり合い、完全に渾然一体となつて、もはや両者の又い目もわからないほどなのである。もし誰かに、なぜ彼が好きだったのかと、しつこく聞かれても、「それは彼だったからだし、私だったから」と答える以外に、表現のしようがない気がしている。

私は本当に「溶ける」という意味で話しているわけで、われわれは、彼のものであれ、私のものであれ、とにかく自分に固有のものは何一つ残しておかなかつたのである。

両者がこの友達関係に自分のすべてをケイチユウするのだから、後には何も残らない。するとどうなるか。これ以外にはもはや別の友情を結ぶ余地はない、ということになる。

私が話題にしている完璧な友情は、分割不可能なものであつて、各人がその友に自分をまるごとあげてしまうので、他に分けるものなど残らない。（……）ありきたりの友情は、それを分割することができる。

つまり、唯一人の友しか持つことができなくなるのである。「一性」の第二の意味だ。モンテーニュの友情は、排他的な友情だ。これでは、恋愛と大同小異ではないか。実際、モンテーニュのラ・ポエシーとの友情は、同性愛にととても近い。性行為がないだけだ。二人だけの間の閉じられた関係であり、そこには、妻すら入り込む余地はない。I、妻とは、モンテーニュは「精神的な」関係は結びえなかつたのではないかと疑われさえする。

II、モンテーニュのケースのような友情は友情ではない、と言いたいのではない。そんな馬鹿なことはない。ただ、こういう友情を「真の友情」と位置づけることはしない、ということだ。そうしてしまうと、世の大半の友情は「偽の友情」になってしまう。ほとんどすべての友情が失格のXを押されてしまうことになる。

唯一無二の親友、というこのイメージについては、言われねばならないことは多くない。それが素晴らしいことはいささかも否定しないし、する必要もないだろう。Ⅲ、それを理想の友情へとYことは願い下げにするだけだ。これを「真の友情」とみるべきではない。「完全な友情」でもない。これは「トクイな友情」だ。

菅野仁が『友だち幻想——人と人の（つながり）を考える』の中で主張していることは、モンテニユ型の友情を友情のモデルとすることに対するとても的確な批判になっている。引用しておきたい。

「自分のことを百パーセント丸ごと受け入れてくれる人がこの世の中のどこかにいて、いつかきつと出会えるはずだ」という考えは、はっきり言って幻想です。

信頼できる「私と同じ人」を探すというよりは、信頼できる「他者」を見つけないという感覚が大事です。

どうということかという点、信頼はできるかもしれないけれど、他者なのだから、決して自分のことを丸ごとすべて受け入れてくれるわけではないということを、しっかり理解しておこうということなのです。

価値観が百パーセント共有できるのだとしたら、それはもはや他者ではありません。自分そのものか、自分の〈分身〉か何かです。

モンテニユの例ほど極端ではないとしても、恋愛に当てはまるのと同じことが友達関係にも当てはまることは確かだ。友達関係においても、人を選ぶ（選り好みする）ということがある。別の言い方をすると、友達関係にも「排他性」が伴う。この人とは友達になれるけれども、あの人とはなれないということが、友達関係にも——本質として——含まれるだろう。そして——本質なのだから——それで何ら差しつかえないのではないか。

考えてもみよう。すべての人と友達になりたいとは、実は、相手は誰でもよい、ということではないか。もし誰でもよいのであれば、そんな友達なんて友達の名に値するだろうか。友達になるためには、相手のことをよく知っていることは、大前提だろう。友達の多い人というのは、少ない情報だけで、友達になれる（なった気になれる）人のことだ。他者との関わりにおいては、

Ⅳ、その関わりの強度、深さという側面もまた問題にならずにはすまないはずで、多くの友達とは、薄い友達に他なるまい。「私はあらゆる人と友達になりたい（人類はみな友達）」などと言う人には、「友達」や「友情」ということが、実はわかっていないのだ。仮に、できるだけ多くの人と友達になりたい、と言い換えたとしても、数ばかり気にして、相手が誰であるかは

たいして問題にならないのだから、大きな違いはない。

「友達の輪」という言葉がある。「輪」だから、両端が開いたままでは駄目である。閉じていないければならない。「輪」に加わる（つながる）人もいるが、その輪に加われない人もいるということだ。その場合、「仲間はずれ」と呼ばれる。「仲間はずれ」というのは嫌な言葉だと私も思うが、しかし、だからといって、「人類はみな友達」という言葉だって、薄っぺらいし、嘘うそくさい。愛が「排他性」「閉鎖性」をその本質とし——二人きりになろうとし——だからといって非難されるいわれがないのと同じ様に、友情にあっても、それが世界に開かれていないからといってタダちに駄目カという話にはなるまい。選別がなされる、ということ、新たなメンバーシップに対して扉ドを閉ざす、ということがありうる——それが「友達関係」なのではないか。

既に挙げたホネットの言い方をエンヨウキすれば、友達になろうとすることは「承認をめぐる闘争」に「Z」を投じるといことなのであり、そこに選ばれない人、闘争に敗れる人が出てくるとしても、それはそれで仕方がないことなのだ（人を否定的に評価し、嫌な人として斥しけ、どうでもよい人として無視する、という振る舞いは、「承認の拒絶」と表現される）。闘争である限り、敗者は必ず現れる。敗者が出来ない闘争など八百長だ。

友達になるとは、ある特定の他者を自分にとって大切な存在として認めることだ。そして、そのことと、大切でない他者とは区別するということは、背中合わせいになっている。仲間はずれにすることが好ましいことでないのはその通りだが、だからといって、「みんな友達」と言ってしまうのでは、「友達」ということの大切な意味を消し去るに等しい。

友達関係には人の「取り替えのきかなさ」「かけがえのなさ」という側面が関わっているということだろう。ちょうど、愛する人が、唯一人でなければならぬように。友達がたくさんいる人、というのとは、ちょっと怪しい人だ。「たくさん友達を作りましょう」というメッセージがどこか胡散臭ういのは、そういうことも関係しているはずだ。「友達をたくさん作る」という教育は、教育の場で普通に行われていると想像されるが、これは「友情」の何たるかをわきまえない、誤った教育なのではないか。平和な世界を作ることと、友達を作ることとは同じことではない、ということでもある。

（藤野寛『友情の哲学——緩いつながりの思想』による）

問1 二重傍線部ア～キのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア	ズイソウ	1
イ	ドウリョウ	2
ウ	ヌイ	3
エ	ケイチユウ	4
オ	トクイ	5
カ	タダちに	6
キ	エンヨウ	7

問2 傍線部a～cの漢字の読みをひらがなで記せ。

a	魂	8
b	扉	9
c	八百長	10

問3 波線部あ～うの語の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

- あ 大同小異 ① 同じところも違うところもあって、完全には一致しないこと
② 小さな違いを無視しているため、同じように見えてしまうこと
③ 細かな違いはあっても、全体的にはほとんど変わりが無いこと
④ 小さな違いにはこだわらず、物事を大きな目で広く見ること
⑤ おおざっぱに見れば同じだが、小さな違いが無視できないこと

い 背中合わせ ① 二律背反

- ② 表裏一体
③ 面従腹背
④ 背水之陣
⑤ 眼光紙背

う 胡散臭い ① 嫌悪感を抱かせてしまうようす

- ② 悪意が含まれているようす
③ 不快感を与えてしまうようす
④ 何となく疑わしいようす
⑤ 明白な誤りが表れているようす

問4 空欄 I 〱 IV に入る語句として最も適当なものを、次の①〱⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。

- I 14 ・ II 15 ・ III 16 ・ IV 17
- ① ただ ② それに対して ③ なぜなら ④ やはり ⑤ だからといって

問5 空欄 X 〱 Z に入る語として最も適当なものを、次の各群の①〱⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

X 18 ① 実印 ② 焼印 ③ 烙印^{らくいん} ④ 朱印 ⑤ 封印

Y 19 ① 祭り上げる ② 盛り上げる ③ 飾り立てる

④ はやし立てる ⑤ 決めつける

Z 20 ① 一票 ② 匙^{さし} ③ 一石 ④ 賽^{さい} ⑤ 身

問6 傍線部 A 「友情論」とあるが、筆者はモンテーニュの友情論をどのようにとらえているか。その説明として最も適当なものを、次の①〱⑤のうちから一つ選べ。 21

① モンテーニュの友情論は、自らのすべてを賭けて唯一人の友と溶け合うことを理想としており、友情が本質的に持つ排他性をはつきりと出ており、自分たちの友情以外のすべての友情を、偽の友情とみなしている。

② モンテーニュの友情論は、二つの魂が出会い、分割不能になるという二つの「一性」を、その特徴としているが、そのため友情は恋愛に非常に近く、二人だけの閉じられた関係において相手を強く束縛するものとされている。

③ モンテーニュの友情論では、なぜその友を選ぶのか説明できないまま、唯一の友と完全に一体となることが求められるため、必然的に同性愛的傾向を持つようになり、そのことが、恋愛や結婚の軽視にもつながっていく。

④ モンテーニュの友情論は、二つの魂が溶け合い、相手と渾然一体となることを理想としているため、相手にすべてを与え、自分に固有のものが何一つ残らなくなるので、他の人とは精神的に結びつくことが困難になる。

⑤ モンテーニュの友情論では、自分をまるごと相手にゆだねてしまい、完全に渾然一体となっていくことを真の友情のあり方ととらえているため、相手の存在を理想化し、運命的な出会いだったのだと思ってしまう。

問7

傍線部B「これを『真の友情』とみるべきではない。」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

22

① モンテーニユのような友情は、いわば自分の分身との友情と言うべきものになっており、友情とは本来、信頼はできてもあくまでも他者との間に結ばれるものであるという、大切な認識が欠如しているから。

② 唯一無二の親友との完全な友情というモデルは、他者に対する幻想に基づいた一方的なもので、世の中の大半の友情を偽物と断じてしまう危険性を有しているものであり、とても友情と呼べるものではないから。

③ モンテーニユが理想とする友情のあり方は、確かに素晴らしいものかもしれないが、友人に対して自分を百パーセント受け入れてほしいというのは単なる甘えであり、自分からも歩み寄っていくべきだから。

④ 唯一無二の親友との友情だけが真の友情なら、世の大半の友情は偽の友情となってしまうので、この考え方に対しては、その位置づけや評価について、様々な面から議論が尽くされなければならないから。

⑤ 唯一無二の親友というイメージは素晴らしいが、私が信頼できたり、私を百パーセント受け入れてくれたりする他者が存在し、必ず出会えると考えるのは幻想であり、それはもはや他者ではないから。

問8 傍線部C「恋愛に当てはまるのと同じことが友達関係にも当てはまる」とあるが、筆者は、友情と恋愛の関係についてどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 23

- ① 恋愛と友達関係は、本質的に同質の傾向を持っており、仲間はずれが存在することや世界に開かれていないことを周囲から非難されても、排他性や閉鎖性を貫こうとする。
- ② 恋愛も友達関係も、人を選ぶという本質は共通しているが、恋愛が二人きりになろうとするのに対し、友達は「輪」を形成するため、閉鎖性については相当の隔りがある。
- ③ 恋愛は二人きりになろうとする閉鎖性・排他性を持つが、友達関係も友達の輪という閉鎖性を有しており、また、そのことをすぐには非難されるべきでない点でも共通している。
- ④ 恋愛と友達関係では、性的な行為の有無を除いて共通点が多いが、恋愛で二人きりになろうとすることは認められるのに対し、友達関係における仲間はずれは容認されにくい。
- ⑤ 友達関係は多くの点で恋愛と共通しており、恋愛が排他性を有する点について容認されるべきであるのと同様、仲間はずれや薄い友情の存在も、通常、非難されるべきではない。

問9 傍線部D「『友達をたくさん作ろう』という教育」について、筆者は否定的にとらえているが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 24

- ① 友達を作るということは、自分にとってかけがえのない人を「承認をめぐる闘争」を通じて、自らが自主的に発見していくことであるのに、「友達をたくさん作ろう」という教育によって数だけを強制的に増やそうとすることは、友情の本質に反することになるから。
- ② 友達をたくさん作ろうとすることは、実は相手は誰でもよいということであり、友達になるための「承認をめぐる闘争」に勝つ自信や、大切な人とそうでない人を区別する勇気がないために、数ばかり気にして友情の本質をゆがめてしまうから。
- ③ 真の友情においては、その関わりの強度やかけがえのなさこそが問われるべきなのに、「友達をたくさん作ろう」という教育では、そのことがなおざりにされ、表面的に誰とも仲がいいふりをするだけの、偽善的な友情を作り出してしまうことになるから。
- ④ 友達になるとは、「承認をめぐる闘争」によって、その他の多くの人と自分にとってかけがえのない人を区別し、選ばれた人との深い関わりの中で相手にすべてをゆだねていくことであり、友達の数だけを気にするのは友情の最も大切な部分を失うことになるから。
- ⑤ 友達になることは、「承認をめぐる闘争」に加わることである以上、必然的に敗者を生むことになるが、「友達をたくさん作ろう」という教育は、友情が他者を区別することであるという側面から目を背けさせ、友情の本質を取り違えさせてしまうといえるから。

問10 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 25

- ① 平和な世界を作ることと友情をはぐくむことは同じではないが、真の友情によって信頼できる他者を発見し、それが輪になることで平和につながっていくことが可能になる。
- ② 唯一無二の親友も、たくさんの友達を作ること、真の友情とは言えないものである以上、仲間はずれを生むことをいとわず、閉鎖性を本質とした友達の輪を作り出すしかない。
- ③ 友情は、私と全く同じとは言えないが、信頼できる特定の他者を選んで、その人を大切な存在として認め、取り替えのきかない関係を結んでいくことであると言える。
- ④ モンテーニユの友情論は極端であり、それを理想の友情論とすることはできないが、それを的確に批判した菅野仁も、友達を「幻想」ととらえている点は認められない。
- ⑤ 様々な争いの存在や、その結果として敗者を生み出すことは、排他性を本質とする友情の宿命ではあるが、そのことはやはり社会に様々な不都合を生み出すことになる。

第2問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

定住により一箇所に多くの人口が集まって村という共同体を作り、^A永続して住むようになる。人間関係はおのずと複雑化する。無用な争いをさけるために人びとや家族どうしのあいだに序列が作られたり、血筋や能力に応じて社会的な役割分担が生まれたり、そうした序列や分担にしたがって物資を交換・分配する経済的なくみが芽ばえたりした。このように複雑化し、さらには定住して「逃げ場」がなくなった人間関係のなかで少しでも有利な立場を求め、個々人はさまざまな社会的行為——巧みな弁舌^a、寛大さの発揮、技能や資質の誇示^あ、見ばえや身だしなみの演出等々——を駆使するようになる。これは、現代の私たちが他人のうわさ話をしたり、飲み屋で後輩に気前よくおごったり、仕事の出来ばえを競ったり、おしゃれをしたりするのと同じことだ。

共同体内部での人間関係や社会的行為がこのように複雑化するのにもなつて、外部に対する人びとの意識も新たになった。すなわち、みずから多くの労力を投じて切りひらいた耕地や、周囲にあつて日々の暮らしを保証してくれる森林や漁場などのかげがえのない不動産をもつことによつて、それまでの遊動生活にはなかつたような強い領域意識とそれを防衛する意図とが生み出されたのである。

それはおのずと、隣り合つて定住する他の共同体との競争や緊張関係をもたらし、^Iみずからの共同体への帰属意識を強化した。さらには、それを分かち合う共同体のメンバーのあいだに緊密な連帯をうながした。これもまた、共同体のスケールとはちがうけれども、近隣の国々や民族への敵対感情や差別意識をあおることによつて国民の^Xの強化や結束をはかる一部の近代国家と同様といえる。

以上のように、およそ七〇〇〇〜六〇〇〇年前をピークとする温暖期の訪れは、定住という新しい人類史の段階を開いた。定住によつて増えた人口は、人と人、人と共同体のあいだに、それまでにない複雑な社会関係を^アジョウセイしていった。

定住による社会関係の複雑化と、土器の素朴段階から複雑段階への変化とが、約七〇〇〇〜六〇〇〇年前という年代に^イキを一にして起こつたのは、^Bけつして偶然ではない。明確な因果関係が考えられるのである。

複雑段階への変化は、機能や技術の側面ではなく、作り手や使い手の社会的な感情や思考を反映する心理的な側面、すなわち美の領域において生じた。^{II}、煮炊きや貯蔵をよりよくこなうための改良ではなく、人の心をより強く引きつけるための演出という方向に走つたのが、複雑段階の土器だったといえる。

温暖化による定住の本格化は人口の増加を導き、それが社会を複雑にした。その複雑化した社会を舞台に、作り手や使い手がメッセージを発する^Yとしての役割が、人工物にゆだねられるようになった。なかでも土器がその役割を一手に引き受けた要因は、それがもつ^い可塑性の高さ

のゆえだろう。加えて、移動の必要のない定住生活では重たい家財道具がいくら増えてもよく、土器はそのサイ^ウたるものとして、素朴段階の何十倍もの量が作られるようになった。そうすると、たくさん作られて壊れていくという新陳代謝のよさが変化の回転を速くし、土器は短い期間のうちほとんど復雑化した。

Ⅲ、老若幅広い年齢層の同居を許す定住生活によって、土器を作りはじめたばかりの若手と、ベテランである高齢の作り手がたがいの作品をくらべ合い、学び合い、競い合いつつ製作にたずさわること、さまざまな情報の刺激が土器の形や表現に反映されるようになった。このような定住生活ならではの世代間交流を通じた学習もまた、土器が多様な複雑さをみせながら変化や変異をとげる要因として働いただろう。

定住前の素朴段階の土器のほか、木葉形の石ヤリ、女性の人形、洞穴壁画などのように、技術の単純さやヒトの認知の普遍性に根ざして美の形が広く長く共通していた状況を「美の第一の地平」とよぶとすれば、土器を主たる媒体に美が社会関係を演出して物時計^注や物地図の働きをケン^エチョ^カにしはじめた状況は、「美の第二の地平」と称することができるだろう。第二の地平は、定住の本格化とともに人類史の一階^{かいて}梯として開かれた。今にいたる世界各地の物質文化の多様な複雑さは、ここから始まったのである。

第二の地平を代表する複雑段階のさまざまな土器のうちでも、日本列島の縄文土器は、造形、表現、意匠^うとあらゆる面で、世界でも際立った存在だ。土器の複雑化をもたらした社会の諸条件がとくにそろっていたことがその理由だろう。

さらに加えるとすれば、天然の食糧をそのまま採取するという暮らしだったので、農耕ほどの厳しく長い労働がいらぬ分、土器製作により多くの時間や労力が割ける、つまり余裕が多かったという説明もなりたちそう。また、堅果類や魚・貝など、煮^ノ沸^ノしなければならぬ食物への依存度が強かったためにとくに多量の土器を必要としたことも、縄文土器の隆盛^シを支えた条件の一つにあげられる。

複雑段階の世界的典型といえるこの縄文土器を材料に、美の形と社会の形とにどのような関係があるかをさらに掘り下げ、美の第二の地平という人類史段階の本質を見きわめてみたい。

最盛期の縄文土器に、不均等・不均衡・非対称・奇数など、自然な思考が求めがちなパターンからは逸脱した、私たちにⅣ「不合理」とも感じられるような造形や表現が盛り込まれていることは第二章と第三章とでくわしくみたとおりだ。これは逆に、均等・均衡・対称・偶数など、つまり釣り合うことや割り切れることをよりⅤに価値づける「合理」的な私たちとはまったく異なった思考や世界観や価値観を、縄文時代の人びとが保持し、それに沿って生きていたことの反映である。

また、縄文土器の文様は、見ようによつて「どうにでもとれる」意味ありげなあいまいさもち、通常は文様の帯が水平方向にのびる区切りを上下にはみ出して展開する。さらに、煮炊き、

貯蔵、盛りつけなど、機能に沿った形の作り分けが最盛期の縄文土器にみられないことも、さきに述べた。造形のなかに機能が埋没しているのである。

これらのことを一言でまとめれば、道具としての形や文様のあり方において、縄文土器は、私たち現代人の「理」になっていない。私たちの「理」とは、物理的な理屈に沿ってあいまいを避け、区切るべきを区切り、分けるべきを分けるという考え方の枠組だ。「科学的思考」ともよびかえることができるだろう。

縄文の人びとが、私たちと同じ「科学的思考」をしていなかったのは、彼ら彼女らの能力が劣っていたためではない。彼ら彼女らは私たちとまったく同じホモ・サピエンスであり、彼ら彼女らから私たちにいたる遺伝子の変化は、形質（身体や心の特性）には見た目の影響を何らおよぼさぬほどに微々たるものだ。同じ性能の脳を用いながら、私たちの枠組とは別の枠組で万象のことを考え、物事を切り分けていたにちがいない。同じ機種のコンピュータに、別のアプリケーション・ソフトを入れたようなものである。縄文文化や現代文化というときの「文化」が、このアプリケーション・ソフトにたとえられ、具体的にいうと、物事の切り分け方や、それをもとにした考え方の枠組に相当する。

自然界から何をどのように取得して食物とし、そのためにどんな暮らしをしているかということ、物事をどのように切り分けて概念とし、それをもとにどのような考え方の枠組を作って行動するのかわかることは、密接に関係している。前者の都合のいいように、後者はオリナされてくるかといつてよい。人工物の形や表現は、後者、すなわち物事の切り分け方や考え方の枠組を反映したものだ。そうだとすれば、そうした枠組を仲立ちに置くことによつて、どのような経済や社会がどのような姿の人工物を生み出すのかという、この章で目ざす答えに近づくことができるだろう。

そういう目で縄文時代の経済をみると、これまでにたくさんさんの発掘調査や研究で明らかにされているように、クリやドングリなどの堅果類の採集、網・釣り・ヤスなどによる海やカセン・湖沼での漁撈、貝とり、弓矢やわな・落とし穴による狩猟、ところによってはイモ類・豆類・雑穀の栽培といったように、多様な食料源を組み合わせたスタイルだった。これらは、自然の恵みからそのまま、あるいは最低限の労力をかけたくらいで得られるものだから、人びとの暮らしもほかの動物たちのそれと同様、自然の生態系の一部に組み込まれたものだったといえる。

この点で、生態系を完全に改変してしまう本格的農耕の社会や、その延長線上にある私たちの現代日本社会と縄文社会とのちがいは、きわめて大きい。私たちの「理」＝文化＝アプリケーション・ソフトと縄文時代のそれとのあいだに横たわる差異は、このちがいに根ざしているのである。

(松木武彦『美の考古学——古代人は何に魅せられてきたか』による)

(注) 物時計や物地図——筆者はここより前の章で、人工物の変化が時間の推移を表すことを「物時計」、地域ごとの差異を表すことを「物地図」と呼んでいる。

問1 二重傍線部ア～カのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア ジョウセイ
イ キ
ウ サイ
エ ケンチヨ
オ オリなされて
カ カセン

26
27
28
29
30
31

問2 傍線部a～dの漢字の読みをひらがなで記せ。

a 弁舌
b 煮沸
c 埋没
d 万象

32
33
34
35

問3 波線部あ～うの語の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ 誇示
① 得意げに見せつけること
② 大げさに賞賛すること
③ 向上に努めること
④ 自慢話を盛り込むこと
⑤ 虚実を交えて説明すること

36

い 可塑性
① 複雑な文様を刻みつけられる、固くてなめらかな性質
② 物の形を作るのに適した固さとしなやかさがある性質
③ 何度も手直しを加えられる、いつまでも柔らかい性質
④ 時間の経過とともに変容し、美しさを増していく性質
⑤ どんな形にも変形でき、そのまま元には戻らない性質

37

う 意匠
① 計算された機能性
② 洗練された完全性
③ 工夫された装飾性
④ 自然と調和した安定性
⑤ 生活に合わせた利便性

38

問4 空欄 I 〱 IV に入る語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。

I 39 ・ II 40 ・ III 41 ・ IV 42

- ① さらに
- ② つまり
- ③ なぜならば
- ④ いわば
- ⑤ ところが
- ⑥ ひるがえっては

問5 空欄 X 〱 Z に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。 X 43 ・ Y 44 ・ Z 45

- ① コンテキスト
- ② ポジティブ
- ③ アイデンティティ
- ④ パラドックス
- ⑤ メディア

問6 傍線部 A 「定住により一箇所に多くの人口が集まって村という共同体を作り、永続して住むようになる」とあるが、「定住」の結果、人びとのあいだにはどのような変化が生じたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 46

- ① 裕福な暮らしを共通の目標とする共同体の内部では、構成員それぞれが序列や役割に依拠して働くようになり、外部の共同体に対する警戒のために協力するようになった。
- ② 気心の知れた家族や仲間がいる共同体の内部では、序列や分担を受け入れて平穩に過ごすことを優先するようになり、外部の共同体からは無慈悲に略奪するようになった。
- ③ 序列や役割が定まっている共同体の内部では、上位の人間の歓心を買う社会的行動を積極的に取るようになり、外部の共同体のことは敵意をもって見るようになった。
- ④ 構成員が固定される共同体の内部では、揉め事を起こさない方策として序列や役割を重視するようになり、外部の共同体とは利権をめぐって対立するようになった。
- ⑤ 離脱不可能な共同体の内部では、構成員同士の衝突をさける目的で序列や役割を行動の指針とするようになり、外部の共同体とは一個人として自由に交流するようになった。

問7 傍線部B「明確な因果関係」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 47

① 定住により社会関係が複雑化し、共同体のなかでの自分の立場を高める必要が生まれたために、人びとは求心力のある魅力的な土器を作ろうと試行錯誤するようになり、土器が複雑化したということ。

② 定住により社会関係が複雑化し、共同体のなかでベテランの作り手から技術を学ぶ機会が増えたために、人びとは高い技術を駆使した精密な土器を作れるようになり、土器が複雑化したということ。

③ 定住により社会関係が複雑化し、共同体のなかで高い地位に就きたいという欲が生まれ、たために、人びとは権力の象徴となる土器を作ろうと表面を華美に飾り付けるようになり、土器が複雑化したということ。

④ 定住により社会関係が複雑化し、共同体のなかでの居場所を自力で確保しなければならなくなつたために、人びとは自分の有用性を証明する機能的な土器を作ろうとするようになり、土器が複雑化したということ。

⑤ 定住により社会関係が複雑化し、共同体のなかで老いも若きも奇抜な土器の製作に挑むようになつたために、人びとは不合理で意味深長な土器に心引かれるようになり、土器が複雑化したということ。

問8 傍線部C「縄文土器の隆盛」とあるが、その要因の説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 48

① 移動のたびに道具類を運搬するという手間から解放された定住生活のおかげで、加工しやすい素材を活かしたさまざまな形状の土器をふんだんに作つてもよかつたこと。

② 多様な年代の人が共同生活を営むなかで若手とベテランが互いに切磋琢磨^{せつさくたくま}でき、他者から受けた刺激を投影した新たな表現の土器を生み出せる環境であつたこと。

③ 人類にとって普遍的な道具である土器に美的な装飾を施すことで、縄文土器が世界でも際立つた存在感を示して世界の物質文化に影響をおよぼしていたこと。

④ 自然の恩恵にあずかって天然の食糧を採取することで暮らしが成り立つようになり、人びとが土器の製作に専念するのに十分な心身のゆとりを保てたこと。

⑤ 人びとの日々の食糧が堅果類や魚・貝などといった煮炊きを必要とする類いのものであつたために、その道具として土器の需要が高く大量生産が可能だつたこと。

問9 傍線部D「縄文土器は、私たち現代人の『理』になくなっていない」とあるが、その理由を筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 49

- ① 道具一つにも合理的な機能美を求めるなど、科学的な思考が習慣化している現代人とは異なり、生態系の一部として他の動物たちと同じ野性的な生き方をしていた縄文の人びとには、合理性や実用性という観点で物事をとらえる能力が欠けていたから。
- ② 生態系は改変すべきものだという発想に立ち、物事が合理的に割り切れることをよしとする現代人とは異なり、自然の恵みをいただき生態系の一部として生きていた縄文の人びとには、現代人とは別の物事の切り分け方や思考の枠組があったから。
- ③ 同じ性能の脳をもっているにもかかわらず、不均衡や非対称を好む縄文の人びとの発想についていけない現代人とは異なり、めまぐるしく変化する自然にうまく対応していた縄文の人びとには、現代人より柔軟な思考パターンがあったから。
- ④ 生態系を離れて人間だけの安穏な環境で生き、釣り合うことや割り切れることに安心感を得る現代人とは異なり、生態系の一部として過酷な自然環境と対峙^{たいじ}してきた縄文の人びとは、不合理をものともしない強靱^{きやうじん}な精神をもっていたから。
- ⑤ 緻密な計算のもとで生態系を改変し、農耕中心の労働^{いそ}に勤しんできた人びとの子孫である現代人とは異なり、天然の食料源を組み合わせ気ままな食生活を享受していた縄文の人びとは、あいまいさや不揃^{ふぞろ}いを許容する価値観を身につけていたから。

問10 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 50

- ① 狭い人間関係のなかで自分の才能をひけらかす言動を繰り返し、かえって反感を買ってしまうのは、今も昔も変わらない現象である。
- ② 仲間内で気前よく物を分け与えて結束を強めたうえで、敵対する共同体に立ち向かおうとするありさまは、近現代の国家にも通ずるものである。
- ③ 道具の使いやすさや技術の高さが人びとの賞賛の的となったことは、美の第二の地平において、土器の進化に拍車をかける効果をもっていた。
- ④ 最盛期の縄文土器には、機能とは無縁のアンバランスな造形や表現が盛り込まれており、そこにこそ現代人を引きつける奥深さがある。
- ⑤ ある時代の経済や社会の状況に連動して人びとの考え方の枠組が定まり、その枠組の影響下に、その時代特有の人工物が生み出されてきた。

(国語の問題は終わり)